

内田不知庵と武蔵屋叢書閣

——「武蔵屋本」出版事業と〈ドラマ〉論——

大 貫 俊 彦

一、はじめに

——武蔵屋本が同時代に果たした役割と文学者

明治期における浄瑠璃本の出版と普及には金属活字を用いた翻刻がその中心的な役割をはたし、なかでも元禄文が脚光をあびる明治二〇年代前半の近松門左衛門の受容を考えるうえで見逃すことができないものに「武蔵屋本」と呼ばれる書物がある。⁽¹⁾「向イ鳳凰丸紋散らし」を表紙にあしらった仮装本仕立て、定価七銭。手軽さに加え、価格面でも読者が親しみやすいこの冊子を刊行したのは、「義太夫狂」と称された武蔵屋叢書閣主人こと早矢仕民治である。民治のこの事業に対する意向は、いくつつかの武蔵屋本に付けられた序文に見ることができる。

実に其著作にかゝる院本ハ洒々落々一種言ふべからざる有味の妙文字にして（略）古来粹に上りたる所の者ハ世に丸本と称するものにて単に梨園社会の用を計りたるものなれば之を見るも何となく煩はしき心地し且つ其刻本とても日を追ふ

て散逸に流れ終には迹を斯文壇に絶するの憂なきにあらす

（出版者謹白「序」『十二段』（近松門左衛門作）叢書閣、明治二二年一月）

近松の文章を評価し、丸本を読みやすくすることで幅広い読者に提供できる冊子づくりをめざす。その背景には、浄瑠璃本の散逸に対する危惧がある。藤木秀吉氏は「武蔵屋本考」で民治が残した功績を、近松物を中心とした浄瑠璃本の収集、丸本から活字本への「読みやすさ」に重点を置いた翻刻、坪内逍遙の近松研究のテキストとして用いられた等の読書界への寄与、のちの近松集の底本にもなったと評価した。⁽³⁾

ところで、このような功績をもつ武蔵屋本の出版事業には、「相談役」として同時代のふたりの文学者が関わっていたことが指摘されている。当時批評家として活躍していた内田不知庵（のちの魯庵）と、江戸時代の文学に精通し、自ら創作もしていた饗庭篁村である。しかし、先行研究が扱える魯庵の回想（近松二百年忌における講演。注（2）参照）には、ふたりが翻刻の相談にのつたという

発言はあつても、それ以上具体的なことには触れず、隔靴搔痒の感をぬぐえない。藤木氏が「廿五年に出た武蔵屋本の合本」近松世話浄瑠璃」に、(引用者注：魯庵)氏は堂々と近松の芸術を論じた長文の序文を書いてゐたり(略)当時から相当に面倒を見てゐたものと思はるゝ、(同、九九頁)と指摘するように、じつさいの武蔵屋叢書閣との関係はもつと深いように思われるからだ。

本稿はこの問題について、現在演劇博物館が所蔵する明治二〇年代に不知庵が逍遙にあてた書簡を手がかりに不知庵の側から迫るものである。ここに記された武蔵屋叢書閣にかかわる記述をもとに、不知庵が武蔵屋本において試みようとした近松をはじめとする浄瑠璃の評価を析出し、当時文学観として思案していた(ドラマ)の問題と関わらせながら、武蔵屋本の出版事業において不知庵の(ドラマ)が果たした役割について考察してみたい。

二・ 不知庵の書簡と武蔵屋本「緒言」

——新しい(ドラマ)として

二・① 二通の書簡と「新編倭文範発行の趣意」

まずは武蔵屋叢書閣と不知庵のかかわりを探るための手がかりとなる二通の書簡を紹介し、検討するところからはじめてみたい。

この書簡は「内田魯庵書簡集(博物資料、二二五番)に納められ、すでに林京平氏が翻刻し、小番号とおおよその年代を推定している(「諸家の書簡四内田魯庵」『坪内逍遙研究資料』第四集、新樹社、昭和四八年七月)。本稿で注目するのは三番と三〇番である。

三番(翻刻者推定、明治三年三月ごろ)から見てみよう。

：「歌祭文」は神田叢書閣(近松もの翻刻元)の蔵書に候得ば 早速同主人に話しをき候につき 多分そのうち持参の事と存じ候 なほ外にも少々の蔵本は可有之候

小生も此ごろ日本をドラマ(院本)国と思はれ候故 ポツ

く 研究の存念に付いろく御教示にあづかり度候
近松巢林子をはじめ名ある作者どもの骨髄と思はるゝもの概ネ失当かと考へられ候 且は其志せし処馬菜一流と大に異なりし点もあべきなと思はれ候得ども 従来の読者見通せしなれば 随分をもしるき問題と存じられ候

坪内逍遙に叢書閣の蔵書を貸す約束をしている内容である。「歌祭文」とは「新版歌祭文」(近松半二作)を指す。注目すべきはその直後で不知庵が逍遙に、この頃日本を「ドラマ(院本)国」と思うと説き、近松ら浄瑠璃作者の「骨髄」と思われるものを「失当」とし、従来の読者は見落としているが、そこには「をもしろき問題」があると述べているところだ。「ポツく 研究の存念に付」とは言うものの、この書きぶりから察して不知庵にはかなり確固とした考えがあつたのではなからうか。なお、日本を「ドラマ(院本)国」と思うという発言については、武蔵屋本の緒言を検討した後にあらためて取り上げてみたい。

つづいて三〇番の書簡である。年末詳とされているが内容は三番と対応している。

その、ち御無沙汰仕候 昨晚叢書閣主人参りて新板歌ざい 文出版のよし申候につき 甚だ御氣のどく様に候得ども 右

院本御届け被下度 小生曾て御話し申せしおそめ久松とは
「油屋おそめ袂のしらしほり」にて 作者菅専輔 此人の作
最も近松の心中物にちかしとの事に候 そのうち取よせて貴
覧にそふべく候

叢書閣から「新版歌祭文」の出版が決定したので、返却を求めている内容である。また「お染久松袂の白しほり」（書簡には「作者菅専輔」とあるが紀海音作）も近松の心中物に近いと述べていることも見逃せない。近松の心中物がひとつの評価軸となっている様子をここから読み取ることができる。

さて、ここで話題となっている「新版歌祭文」を収める武蔵屋本をさがすと、明治二四年五月刊行の『福新大和文範』という本が該当する。奥付と凡例によれば、この書物は富貴館との共同資本によって出版した逐次刊行物であり、近松門左衛門以外の「貞享元祿の古きより天明寛政の新らしきに到るまで尽く網羅せんとす」という大部な計画であったことがわかる。その第一編に「新版歌祭文」は収録されている。⁵⁾そしてこの本の巻頭には「新編倭文範発行の趣意」（以下「発行の趣意」とする）という緒言がある。

この文章について藤木氏は、「発行者識」とあるのみで、筆者は明かでないが、恐らく魯庵、篁村等の、武蔵屋応援団の一人の筆に為るのであらう」と見当をつけ、「狂言作者が俳優の掣肘によって作品を支配されたのに対し、浄瑠璃作者は比較的自由な立場に在つて筆を執つたこと、浄瑠璃が妄誕不稽の語を為すとの批難に対して、院本は歴史に非ずとする弁駁、風俗好尚を異にする欧米直訳の演劇改良論に対する論難など、堂々たるものがある」（六

〇頁）とその要旨をまとめているが、ここには重要な要素が抜け落ちている。「発行の趣意」は、その冒頭に「詩の一人人事を咏ずるものは是を「ドラマ」と云ふ」とあり、従来の武蔵屋本の緒言には見られなかった「ドラマ」の観点による浄瑠璃論が展開されているのだが、藤木氏はこの「ドラマ」の問題については触れていない。逍遙宛て書簡との関わりからみても、この緒言は「ドラマ」の観点による検討が必要となることは明白だ。

それでは「発行の趣意」を具体的に検討してみたい。この文章は「詩の一人人事を咏ずるものは是を「ドラマ」と云ふ」という、これまでの武蔵屋本にはみられなかった大きなスケールで書かれている。その内容を簡単にまとめれば、冒頭では神代に遡つて演劇の濫觴を説き起こし、従来演劇の評価が俳優にあったことを批判して「各国の進歩と全じく我が演劇界も「ドラマチスト」の助けし処頗る大なり」と作者の重要性を説く。さらに「ドラマチスト」を二種に分け、俳優の言いなりに脚本を書く狂言作者を退け、音律の存在など若干外見が異なるために「欧州の「ドラマ」と異なれりと為せども、其精神に到つては毫も相違の点を見ず」と「錯綜せる人事を咏」じた浄瑠璃作者を高く評価する。シェイクスピアなどを引いて一見大きい西洋の「演劇」という観点で日本の「演劇」（狂言・浄瑠璃）を再評価するかにみえるこの緒言は、同時に書き手の解釈を取り入れた（ドラマ）の本質論ともなっている。⁶⁾つまり緒言の書き手は「詩」の一つとして、「演劇」（狂言・浄瑠璃）の中でも内容を「重視」した浄瑠璃を形式ではなく「精神」において（ドラマ）と再定義し、そこには「錯綜せる人事」

が描かれていると述べる。では、その（ドラマ）に必要な「錯綜せる人事」とは何か。それは時代物と世話物を例に挙げて説明している次の一節にもっとも明確に表れている。

就中時代物に到つては猛将策士毫も猛将策士の質を供へずして女らしき愚痴を覆し子供らしき大言を吐き殆んど茶番狂言染たる事を演じ更に英豪の実なきが如し。（略）又主人の娘と忍び／＼の転び寝に無分別の死を遂げし若菜頭の久松が武家の胤にて宝刀探索の爲め町人奉公せし事の極めて巧みなるに服するものにあらず。唯是等の短処を厳しく批判して其最も精密に人情の微を穿ちて能く運命の果敢なきを直覚せしむる無双の才藻を埋没するに忍びざるなり。

（発行者識「新編倭文範発行の趣意」『新大和文範』第一冊、富貴館・叢書閣、明治二四年五月）

ここで書き手は時代物を「茶番狂言」じみているとして批判するだけでなく、世話物の「趣向」（脚色）をも批判する。引用文中にある「主人の娘と忍び／＼の転び寝に……」のくだりは「新版歌祭文」の「座塵社」、「長町」の段に相当する。つまり「発行の趣意」（ドラマ）の要点は「時代物」でも、「世話物」の「趣向」でもなく、「世話物」がもつ「最も精密に人情の微を穿ちて能く運命の果敢なきを直覚せしむる」という部分にこそあり、この要素を（ドラマ）の「精神」として提示するのである。

ここに表れた「人情の微を穿つ」、「運命の果敢なきを直覚せしむる」とは、不知庵が自らの文学観を主張するとき用いる常套句である。

曲亭馬琴は文化時代の我国小説の改革者にして文学史中に特筆すべき大家なれども其改革は全般より評すれば我小説を退歩せしめしにあらずや。（略）中興の西鶴其碩の著述を見るに趣向よりは寧ろ人情の微を穿つに意を専らにせしが如し。其文章は極めて婉曲なりし故後人の称揚するは単に是れのみに止まりしかど、反覆熟読せば情致を曲写せし巧妙忘れがたし。

（ふ、ち、「馬琴小説の効果」『女学雑誌』第一六五号、明治二二年六月八日。傍線は引用者による。以下同じ）

今日の文学界にて最もはびこるはアート主義にて候、文字結構若くは人情をうがつなどをもて第一義と考ふる人ばかり沢山御座候、誠に／＼困りし事に候、未だ熟せざる考に候得ども、小説とは社会世事をそのまゝに写して、人間内界の運命を直覚せしむるをもて第一義と為すと存じ候（是はフィツキスド、アイデアに無之候得ば御内々）

（安成二郎「内田魯庵の書翰」田辺花園宛その二『書物展望』第四八号、昭和一〇年六月）

不知庵の文学観は、逍遙の影響を強く受けていた初期評論から少しずつ変化を見せるが、その変遷をよく表しているのが、花圃に宛てた書簡である。そして「人間の運命」に焦点をあてた作品評は、同時期の近松以外の武蔵屋本にも見られる。さらにそれは『文学一斑』（博文館、明治三五年三月）の（ドラマ）の定義、「ドラマ」ハ最も進歩したる人種に属する詩なりと云はむ。（略）詩——最も進歩したる詩ハ人間の運命を示し社会と人性の關係を明

らかにするものなり」(三〇一・三〇二頁)という主張とも通底する。つまりこの「発行の趣意」には、批評家不知庵の(ドラマ)の影響が色濃く表れていると考えられる⁹⁾。

以上のような「錯綜せる人事」という(ドラマ)の評価軸により、『新大和文範』の緒言は「我等素より深く浄瑠璃を味ひしものにあらず。又能く其微を伺視するの批評脳を畜ふるものにあらず。此故に穂積以貫を学んで一々穿細的に評註して世に紹介するの能なく又潜越¹⁰⁾にも以貫流の評註を施すは現代に於て却て無益に属するを信ず」という当代における浄瑠璃の価値を提示することになる。このように武蔵屋叢書閣が新たに近松以外の作品を翻刻しようという試みには、(ドラマ)の概念による浄瑠璃の再評価を孕んだ緒言を伴っていたことがわかる。

二・② 『近松世話浄瑠璃』の(ドラマ)論(付、『文学一斑』)

不知庵の書簡を手がかりに、『新大和文範』に表れた(ドラマ)論をみてきたが、この後武蔵屋本で再び(ドラマ)という概念を用いて浄瑠璃を捉える序文が見られるのが『近松世話浄瑠璃 自元禄十三年至宝永五年』(明治五年四月)である¹⁰⁾。なお不知庵の『文学一斑』はほぼ同時期の刊行である。周知の通りこの中で不知庵は近松門左衛門を(ドラマ)の観点から評価しており、両者にみられる(ドラマ)論には共通する部分が多い。

「不知庵主人」の署名がついた『近松世話浄瑠璃』の「序」が強調するのは、「余は翁(引用者注：近松)が文辞に拙なるや否や、典故に暗きや否や、歴史を誤まれるや否や、是等一切を束ねて悉

く不問に置き。唯翁が作は詩の最も進歩したるドラマたるを認む」という「詩」の価値体系による近松門左衛門の新しい評価の試みである。そして「発行の趣意」が、今読まれるべき浄瑠璃という立場から、「以貫流の評註」を批判したように、ここでも近松が「我国唯一のドラマチストたるを信ずるの外は一切の事歴を挙て悉く之を暗黒の中に投ずるも毫も翁が述作せる諸篇の価値を損ぜざるを知る」と近松の事歴よりも、近松の作品を重視する姿勢をみせる。「詩」——不知庵が「序」のなかで元禄年間の文学を「叙事詩人としての井原西鶴、叙情詩人としての松尾芭蕉、及びドラマチストとしての近松門左衛門」と捉えているように、この「詩」とは美学における「詩」の三分類を想定していることは明らかだ。そして、近松に与えている「ドラマチスト」とは作中に次のような要素を伴っていることが条件となる。

「ドラマ」に到つてハ第一に人間各個の本性を本とし其内裡の質を詳かにし、以て内外二界の間に生ずる衝突及び破壊即ち人其自身が生ずる運命を明かにす。

(不知庵主人述「戯曲、一名世相詩(ドラマ)」「文学一斑」前掲、三三〇頁)

先ほども述べたように、これは武蔵屋本にあった(ドラマ)論と一致する。『文学一斑』ではこの観点に沿い、「心中天網島」の本文を引用しながら小春や治兵衛が置かれた状況を分析する。「親方がせくも太兵衛が張合ふも何恐ろしかるべきとジツト堪へて紙治との縁を維ぐも意地なり。おさんよりの一筆に応へて紙治との縁を絶つも意地なり。此二ツの意地胸裡に闘ふて……」(二六

五頁)とこのように不知庵が近松の心中物に見出す価値は、作中に現れた人物が陥る境遇、さらにその人物に待ち受けている「治兵衛ハ女房おさんが真実なる意見に従ひ形の如く計ふて再び世に出でむとせしに俄然大波濤を起し未来の望悉く絶えしかバ今ハ唯一「死」―是より外に救はるゝ道なかりき」(二七八頁)という終局にある。このような捉え方は、同時代に近松の心中物を高く評價し、「大破裂」というカタストロフィーに注目した坪内逍遙と類似してはいるものの、たとえば逍遙が「近松が時代物」(『小羊漫言』有斐閣書房、明治二六年六月)や「めいどの飛脚」を読みつて梅川を評す(『後の月かげ』春陽堂、明治二四年二月)で説いた「因」と「縁」によって物語を動的に把握する分析とは異なっている。

また、浄瑠璃の文章、脚色、形式を不問に付し、(ドラマ)の要素によってのみ作品を評価しようとする不知庵の試みは、『文学一斑』では次のような脱領域的な発言となつて小説・戯曲の別なく再編成されている。

戯曲ハ最も進歩したる詩にして、院本及び脚本類ハ惣て此中に属す。ギョーテ、シエークスピアの諸作ハ素より近代魯國の文豪ゴンチヤローフ及びドストイエフスキーの著ハ皆此種にして、我国にてハ近松巢林子の世話浄瑠璃蓋し最高の標本たらむ。

(不知庵主人述「詩(ポエトリー)」『文学一斑』前掲。六八頁)

さらにそれは「我国の近松巢林子の作も韻文体なるをもて、「ドラマ」と云へバ則ち脚本と同じき感あれども(略)「ドラマ」ハ必ずしも脚本体に限れるにあらず。(略)「ドラマ」の精神だに備

ふるならんにハ寧ろ散文体即ち、「ドラマ」的小説を望むものなり」(三〇三頁)という近松評価へと展開する。

このように武蔵屋から刊行した『新大和文範』の「発行の趣意」と「近松世話浄瑠璃」の「序」は、『文学一斑』へ通じる(ドラマ)の観点からの、近松物を含めた浄瑠璃の新たな価値を提示した緒言であつたことがわかる。

ここで同時代に近松を研究していた坪内逍遙を補助線にして、もう一度「日本をドラマ(院本)国」であると説いた不知庵の発言に戻つてみたい。従来この時期の逍遙と不知庵の文学観は類似するものとして捉えられる傾向にあるが、不知庵が(ドラマ)の観点から近松の世話物を評価するのに対し、逍遙は世話物を重視しつつも、時代物も含めた総体で近松を捉えるべきであると主張している^⑬。さらに「ドラマ」という言葉については、「我会の諸君に云ふ 英語のドラマハ爾来言語の俤に用ふべし 院本と訳すれば誤解を招く恐れあるべし」と『延葛集』同人に対して「ドラマ」の安易な適用に注意を促し、「ドラマ」と浄瑠璃を別のものとすべきであると説いている。したがつて「日本をドラマ(院本)国」とする不知庵の主張は逍遙は容れないはずであり、この『延葛集』の書入れを、同人の言葉の使用に対する指導であると同時に、不知庵批判と読むことも可能だろう。一方の不知庵が意図したのは、趣向と文体を賞賛し模倣する同時代の近松受容を批判し(「かつら姫」『国民之友』第一〇三号、明治三年二月二三日)、それらに対するアンチテーゼとしての新しい価値を提示する試みであつた。武蔵屋本の「緒言」から『文学一斑』を通じて不知庵は、

自らが説く「詩」の精神によって「演劇（浄瑠璃）」を（ドラマ）化（「演劇」の失効、すなわち「散文」化）¹⁶⁾しようとしてみたのだ。しかし、武蔵屋本の緒言に表れたこのような近松の評価は、民治の出版事業と齟齬をきたすことになる。

二・③ 武蔵屋本「緒言」の（ドラマ）論と内容の齟齬

不知庵の影響のもと武蔵屋叢書閣から刊行した『編新大和文範』、『近松世話浄瑠璃』の緒言には、浄瑠璃や近松門左衛門の新たな価値を提示しているにも関わらず、それらの書物の緒言と内容には大きな編集上の懸隔がみられる。まず『編新大和文範』から見れば、「発行の趣意」で触れていた「新版歌祭文」を除いて、収録作品は時代物中心に編まれているのである。本編の編集方針は（ドラマ）論をもつ「緒言」より「編中集むる処紀海音竹田出雲以下十数人、凡そ大名を場の内外に馳せしもの（略）尽く網羅せんとす」という「凡例」に沿っている。さらに各作品については「作者小伝」では、「近松門左衛門、紀海音は文藻を以て称せられ竹田出雲近松半二は脚色の妙を以て称せらる」と近松半二を「発行の趣意」で批判していた「脚色」の点から評価しているのだ。文章や脚色を評価し、多くの作品を掲載しようというこの方針は、本論のはじめで触れた早矢仕民治の出版意図に近い。『編新大和文範』の「発行の趣意」と内容との間にはこのようなねじれが生じている。

『近松世話浄瑠璃』も同様である。「叢書閣主人」と署名した凡例で、民治は近松門左衛門の伝記と、浄瑠璃の歴史に関する書物

の刊行を約束し、近松を総体的に捉えようという出版意図を読み取ることができる。

すでに見てきたように『編新大和文範』や『近松世話浄瑠璃』の緒言は、浄瑠璃がもつ音律を「束縛」とし、人形を「客」とみなし、以貫流の評註を排することで、作品のなかに描かれた「社会の人事複雑せる現象」を新たな（ドラマ）という価値として提示していた。一方、『編新大和文範』収録の作品は時代物中心であり、貞享から寛政までの浄瑠璃を網羅した作品を読者に提供することを企図した逐次刊行物として出版され、そこには浄瑠璃や近松を全体から捉えようとする早矢仕民治の姿勢が立ち現れてくる。では、武蔵屋の出版事業に関わっていたもう一人の人物、饗庭篁村の近松観はどうなのだろうか。武蔵屋本における不知庵の位置をより明確にするために、武蔵屋の出版事業に関わっていたもう一人の人物、饗庭篁村についても見ておこう。

三、「武蔵屋本」における篁村と不知庵

—— 篁村の近松理解に対する不知庵の批判から

『早稲田文学』創刊以前、明治二三年頃における近松門左衛門を通じた坪内逍遙と饗庭篁村の交流はつとに知られているが、この頃の近松観に関する篁村自身の発言はそれほど多くない。本稿では篁村周辺の逍遙、不知庵らの発言からその近松観に迫ることしたい。

『読売新聞』（明治三年八月五日附録欄）の「今年初半文学界（小説界）の風潮（続）」で逍遙は、「竹のや主人ハ専ら近松の著書を

調べて其伝と論をものせんとし」と篁村が近松の伝記についてまとめようとしていると述べている。さらにその二ヵ月後、坪内逍遙を中心とした東京専門学校の研究会の席で、篁村は近松門左衛門についての講演をしている。そのなかで篁村は「近松出るに及び 勸善懲悪を示し 悲哀の情を起さしめ 而して后無情を悟らしめんと企てたり 但し偏に仏に傾くを免れんとて 儒教を加へたり 而し在来の人形を止め人情の上にて可笑しき事をも見せたり」と近松の登場を評価している。このような発言の背景には、前年に増補版が出た齋藤月岑編『声曲類纂』の「元より和漢の書籍を学び博識にしてしかもよく時世の人情を察し下情を穿ちて百余番の浄瑠璃狂言を作れり」(天保十年成稿、弘化四年刊。福田築造より明治二年一〇月刊。巻二、七丁オ)のような記述を想起することができ、また篁村が手にすることができたかは定かではないが、『音曲道智編』巻之貳(明和頃成立)にも「全体文柄拙からず儒仏神に能渡り字相たとへことを引にも耳にか、らす貴賤のわかち都鄙の国ふり品位ともさこそあらめと滑稽をつくし道行ふし事かけ事も伊勢源氏の佛を文につ、けしかも俗間の流言おかしく自然と貴人高位の御耳にふれさせ給ひしより打統て教の趣向をうみいたせり⁽¹⁸⁾」とあり、篁村の発言と重なる。さらに近松の浄瑠璃本に「釈」(解釈)と「評」(評註)をつけている(『巢林子院本評釈』(『巢林子院本評釈』序)『早稲田文学』第一号、明治二四年一〇月二〇日)を見れば、「人情の秘密蔵を発き世態の種々相を論したるは世話物にあり」という発言も見られ、篁村も世話物を評価していることがわかる。

不知庵も同じく世話浄瑠璃を評価しているが、本稿で見えてきたようにその近松評価は篁村と大きく異なっている。例えばそれは『近松世話浄瑠璃』の「序」で(引用者注：近松)翁を尊ぶものは曰く翁は博学多識深く儒仏の教を極め、事取凡近而義発勸懲するを以て主と為し、聖賢の説く処到底里耳に入らざるを悟て、卑近なる浄瑠璃に幽奥なる哲理を寓し専ら倫理綱常を正ふし世道人心を補益するに力を費しぬト」という要素は此事であるとし、「唯世の嗜好に媚びむが為に浄瑠璃を作りし売文郎とするも罵んぞ翁が作の其価値を減すべけむや。詩の価値は単に其目的の如何に依て高下するを得ざればなり」と主張していることから両者の差は明らかである。さらに不知庵は篁村の小説『勝鬨』(春陽堂、明治三三年四月)に表れた近松の影響を次のように批判する。

勝鬨は(引用者注：篁村)先生が近松或は上田を凌がんと欲して作りしものなりと信ぜず、然れども先生が平日近松及上田を信仰して余に説かれし美は少なくも其篇中に現れしが如し。其文字莊重流麗、ま、妖艶泉柳の姿あり又高潔典雅の風あり。其脚色往々奇絶妙巧にして時には意想外に出づ。是文字脚色即ち先生が近松と秋成に於て服する処にして計すも勝鬨に於て現れしものたらん。(略)篁村先生、先生果して近松の靈氣に感得せしや、然らば其末技たる文字と脚色を学ばずして可なり

(不知庵主人「勝鬨を読んで篁村先生に与ふ」『国民新聞』明治三三年六月一日)

このように篁村の近松評価は、浄瑠璃と作者の歴史の変遷、お

よび注釈を通じて世話浄瑠璃を評価するというものであり、これは本稿ですでに確認した叢書閣主人民治の近松理解に近い。不知庵は篁村の小説に表れた「文字」と「脚色」の面における近松の影響を篁村の近松理解として批判し、それらに対し作品がもつ内在性（詩の本来、「靈氣」、「精神」）を主張する。不知庵が言及しなかつた武蔵屋本の出版事業に関わっていたふたりの文学者の近松観にはこのような違いがあつたのである。

四・惹句としての〈ドラマ〉

——「近松世話浄瑠璃」二四編の集成と不知庵

武蔵屋本の緒言に表れた〈ドラマ〉による近松評価の問題から、武蔵屋本の出版事業に関わつた人物の近松評価を見てきたが、では、彼らの近松評価はすれ違ふだけだったのであろうか。本稿では両者の接点を見出すために武蔵屋叢書閣の出版事業のピークをなし、現在まで通用している近松の世話浄瑠璃二四編の「成立」という出来事に焦点をあてながら、あらためて不知庵の〈ドラマ〉が果たした役割について考えてみたい。

藤木氏が数多くの武蔵屋本を収集するなかからまとめ、秋本鈴史氏が指摘したように、明治二四年から二五年にかけて武蔵屋は「戯曲叢書」「近松叢書」と題して「世話物」を重点的に刊行する。秋本氏はこの出版傾向について「少なくとも二十四年三月頃に武蔵屋として「世話物」を集めるといふ新たな方針が立てられたことが推定される」と説くが、これが第二節で取り上げた『編新大和文範』の出版時期と重なっていることをあらためて強調しておき

たい。つまりこの動向は武蔵屋本の緒言における〈ドラマ〉論の登場と連動しているといえる。「発行の趣意」の主張と収録作品に齟齬をきたしていた『編新大和文範』が、全一二編での完結を約束しながら第一編以降刊行されていないことはすでに見てきた。その代わりに武蔵屋が世話物同士を合本した冊子を刊行しはじめているのである。

さらに同論文で秋本氏は、近松の「世話物」二四編を初めて列挙したのは塚越芳太郎『近松門左衛門』民友社、明治二十一年一月）であるという従来の説を修正し、武蔵屋の『近松世話浄瑠璃』二冊にすでに現行の二四編が集成されていることを指摘している。²⁰

そしてこの近松世話浄瑠璃の「完成」を謳つた『近松世話浄瑠璃』に付いていた袋および刊行前後の広告には、「詩の最も進みたるドラマ」という「序」の一節が引用されており、この書物の価値を象徴する言葉となつている。明らかに〈ドラマ〉論は武蔵屋の出版事業に影響を及ぼしている。しかし、民治が不知庵の〈ドラマ〉論のすべてを受け入れていたわけではないことは確認した。するとむしろこの一節は不知庵の〈ドラマ〉論が持つ理論面よりも、その「先進性」に注目した、今読まれるべき近松世話浄瑠璃という武蔵屋の出版事業に沿つた惹句キョクとして引用されている様子がみえてくる。つまり武蔵屋本にあらわれた惹句としての〈ドラマ〉論の引用の仕方には、広告的な意味と同時に武蔵屋本において不知庵の〈ドラマ〉論が果たした役割をも暗示していると考えることができる。

五・結論

ここまでの考察をまとめてみたい。武蔵屋本の緒言に〈ドラマ〉という言葉が表れ、それによって浄瑠璃が論じられるのは『新大和文範』以降であり、やがて武蔵屋の出版事業は近松の世話物の重点的な出版と、その「完成」へと至る。

武蔵屋本の出版事業の頂点をなす「近松世話浄瑠璃」の「集成」と「完成」には、不知庵の逍遙宛て書簡にもあったように、日本を「ドラマ（院本）国」と思うという発言にもとづく〈ドラマ〉論が影響していると思われる。そして不知庵が武蔵屋本を通じて提示しようとした問題とは、〈ドラマ〉論による浄瑠璃の新しい評価の試みであったとすることができよう。そしてこの〈ドラマ〉とは、浄瑠璃作者の歴史的な観点からの評価でも、読み物として浄瑠璃本を「文章」や「趣向、脚色」の点で評価するものでもなく、「錯綜せる人事」という〈ドラマ〉の唯一の要素から捉えた「演劇（浄瑠璃）」の「散文」化の試みであった。この脱領域的な把握の仕方は、逍遙の警鐘にもあったように、近松やひいては浄瑠璃の固有性を抹消しかねないが、裏をかえせばそのような〈ドラマ〉による線の引きなおしこそが、明治二〇年代前半に問われていた「小説」に対する一批評家の問題提起²¹としてひとつの価値を提示し、確立するための力ともなっていたと評価することができるとする。

同じく仮説の域を出ないが、「義太夫狂」の民治がこの時期の不知庵に見たのはまさにその〈ドラマ〉論の負の部分、〈ドラマ〉

を重視することによる浄瑠璃の歴史性、作者性の排除の部分ではなかったか。今回の考察では、民治と篁村の関係にまでは言及できなかったが、民治と篁村の近松観が似ており、その関係も長く続いたであろうことは推測できる。後に武蔵屋は『近松時代浄瑠璃』（明治二七―二九年）を刊行し、院本の探索と刊行を続けるが、そこに協力者として篁村は挙げられるが、不知庵の姿はもはや見られない。

このように見てくると、「近松世話浄瑠璃」の重点的な刊行と「完成」とは、両者——近松ら浄瑠璃作者の伝記と歴史を評価し悉皆翻刻を志す民治と篁村、「詩の最も進みたるドラマ」によって世話浄瑠璃を捉えなおそうとする不知庵——の近松観が交差することによって、成立したということがわかる。武蔵屋本の出版事業のなかで〈ドラマ〉論が果たした役割とは、惹句という引用に象徴される「先進性」としての〈ドラマ〉であった。

現在までつづく近松世話浄瑠璃二四編の「完成」とは、「義太夫狂」民治の熱意と篁村の浄瑠璃作者や歴史に対する知識に加え、「小説」とは何かという同時代の問題に批評家として果敢に取り組み、答えを出そうとしていた不知庵の〈ドラマ〉論が交錯し、その先鋭性と話題性が抽出されることによってなされた、ひとつの「結晶」である。

注(1) 近松研究史における武蔵屋本の位置づけは『近松 増補国語国文学研究史大成10』（三省堂、昭和五二年九月）を、武蔵屋本についての先行研究は藤木秀吉「武蔵屋本考」（『武蔵屋本考その他』非売

品、昭和十五年四月)を参照した。武蔵屋本に関する言及は他にもあるが、いずれもこの二書に負うところが多い。

(2) 高野辰之「近松忌」『歌舞演劇講話』宝文館、昭和四年一〇月。二九四頁。引用箇所は近松二百年忌における魯庵の講演(大正二二年二月九日)の一節である。

(3) 藤木秀吉「武蔵屋本考」『武蔵屋本考その他』前掲。「出版の苦心」八九・九一頁、「武蔵屋本の功績」一一五頁。

(4) この書簡の年代は、内容から判断して『編輯大和文範』の刊行(明治二四年五月)前であると推定できる。

(5) その他「御所桜堀川夜討」、「鎌倉三代記」、「男作五郎金」、「仁徳天皇万年車」、「金平法問評」。「新編」とあるのは丸善刊「やまと文範」(全三編。小野田孝吾編、明治一四年・一五年)を意識しての命名であろう。

(6) 本論で以下取り上げる「発行の趣意」の「ドラマ」との差を際立たせるため、同時代の一般的な「ドラマ」の語義を補っておく。

「Drama is the action of a play, a poem 戯曲。詩」。「Dramatist, a writer of plays 戯曲ノ作者。戯作者」(棚橋一郎訳『英和双解字典』丸善、明治一八年二月)。「Drama, n. 戯曲、戯曲ニ似タル実事、浄瑠璃」。「Dramatist, n. 戯曲ノ作者」(島田豊纂訳『和訳英字彙』大倉書店、明治二二年一月)。

(7) 「詩の一体」としての「ドラマ」という発言の背景には、叙事詩、抒情詩、劇詩という「詩」の三分類があると思われる。

(8) 発行者識「緒言」『傾城買二筋道』(梅暮里谷喉作)丸善・叢書閣、明治二四年六月。

(9) 「発行の趣意」の人名表記が不知庵の用例と合致しないこともあり(「スエークスピーヤ」(発行の趣意)、「シエークスピーヤ」(現代文学其二)「国民之友」第一三七号、明治二四年一月)、本論では不知庵の「影響」と捉えた。

(10) 『近松世話浄瑠璃』は二冊あり(「自宝永七年至享保七年」明治二五年一月、「自元禄十三年至宝永五年」明治二五年四月)、「序」が

ついているのは後者である。以下本論でいう『近松世話浄瑠璃』とは後者をさす。

(11) 近石泰秋氏は「難波土産」の本文評註について(『操浄瑠璃の研究』風間書房、昭和三六年三月)で、特徴として漢籍や仏典等の字句の註解をするほかに、以貫筆の「発端」とのつながり、近松への敬慕に基づいた評価、作者評判記としての性格を挙げているが、「発行の趣意」の文脈から察して「字句の詳細な註解」と理解しておく。

(12) 越智治雄「逍遙における「ドラマ」の問題」『明治大正の劇文学』塙書房、昭和四六年九月。三四頁。初出は『国語と国文学』第三七巻一、昭和三五年一月。

(13) 「近松の浄瑠璃」『文学その折々』春陽堂、明治二九年九月。なお『逍遙選集』第八巻(春陽堂、大正一五年一〇月。六六五頁)には「明治廿三年頃」とある。

(14) 筑水生「時代世話劇鎌倉三代記を読みみて」『延葛集』第二号、明治二三年一月二日編集。引用は『未刊・坪内逍遙資料集三』逍遙協会、平成一三年一月。二五一頁。

(15) 「辞書の「Drama, n. 戯曲」(『和訳英和字彙』)という項目は、逍遙にとって、Drama の「戯曲」への等価な翻訳ではありえない。それは、あくまでも互いに異なったものの取り合わせでありながら、同時に、そうであることにおいて顕在しえない普遍としての「詩」または「文学」——「我が謂ふ没理想は、没却理想また不見理想の高義を含めり」(「没理想の語義を弁す」『文学その折々』)——をその空隙に招請していると読まなければならない(『谷川恵一』「ジャンルの翻訳」『歴史の文体 小説のすがた』平凡社、二〇〇八年二月。一三三・一三四頁。初出は『文学』第九巻第一号、一九九八年冬号)。「演劇」の失効とは、「形式」(篇章や上演技法)を見ずに「詩」の精神から評価する批評態度に、「散文」化」とは前掲『文学一斑』(三〇三頁)から着想を得た。また、詩の「普遍性」については『文学一斑』の「詩」(六六・六七頁)に詳しい。

(17) 「元禄時代の院本及演劇」『葛の葉』第六号、明治二十三年一〇月五日編集。引用は『未刊・坪内逍遙資料集二』逍遙協会、平成二二年一月。二九九頁。

(18) 『音曲叢書』第二編、非売品、演芸珍書刊行会、大正三年六月。二八頁。

(19) 秋本鈴史「丸本から武蔵屋本へ」『文林』第二二二号、昭和六二年二月。二四頁。

(20) 秋本鈴史「丸本から武蔵屋本へ」前掲。二七頁。

(21) この問題については、拙論「強硬」な不知庵——『浮城物語』論争における内田不知庵の「小説」の保持」（早稲田大学大学院文学

研究科紀要』第54輯第3分冊、平成二二年二月）で一部検討している。

* 本論の執筆、資料の引用にあたり旧字は適宜新字にあらため、ルビは省略した。

* 本論は、平成二二年度早稲田大学国文学会秋季大会（平成二二年一月二八日）における同題の研究発表を一部修正、加筆したものである。なお、本研究は早稲田大学演劇博物館のご協力、逍遙協会林京平氏のご教示を賜った。

新刊紹介

加藤邦彦著

『中原中也と詩の近代』

気鋭の中原中也研究者である著者の、博士論文を基にした一冊。著者は先頃完結した、『新編中原中也全集』の編集に携わるといふ稀有な経験を持つ。その経験が活かされた論考にも見るべきものが多いが、著者は我々が全集を通じて、詩人・作家を固定的に捉えてしまう危険を自覚している。それゆえ、著者の目は詩人が生きていた時代に向かい、活字だけでは見えてこない、詩人の生きた姿を捉える作業に向かう。その動機が明確であるからこそ、各論考が強い説得力を持つ。単なる流行から、同時代現象を調べることに淫していると思え

ない研究が横行する昨今、久々に王道の成果を見た思いがする。後進たる我々にとつて学ぶべき点が多く、詩を研究対象とするか否かに関わらず、必読の一冊。
（二〇一〇年三月 角川学芸出版 A5判 三九七頁 税込六三〇〇円）〔宮坂康一〕

佐藤公一著

『小林秀雄の日本主義』

『本居宣長』論

『本居宣長』の功罪を決定したのは、小林秀雄が生涯貫いた「批評とはオマージュである」という姿勢にある事を本書は暴いている。小林は、宣長に、その内部に入り込み一体化しようとする程の信を置いた。そして、小林は日本語の生成、成長過程を宣長の著書から明らかにした。

佐藤氏は小林のそうした学問的戦略をも、文学芸術を信じ批評研究の対象にした宣長の姿勢そのものであると指摘している。

宣長の学問的戦略とは、訓詁註解から離れ古文獻の本文そのものを享受しようとするもので、固定観念に縛られた賀茂真淵が「古事記」の解釈において「高天原」という言葉に躓いた時、宣長は優れた時空感覚と「本文そのものの享受」によつて乗り越えた。

宣長や小林に寄りそった本書は、彼らの研究に対する並々ならぬエネルギーを伝える事に成功している。文学を学ぶ者にとつて、刺激的な一冊であることは間違いない。
（二〇一〇年四月 アーツアンドクラフツ 四六判 一四一頁 税込一八九〇円）

〔宮下京子〕